



中国がわかるシリーズ 39

モンゴル、大遠征を開始。大金国を滅ぼす

ライフネット生命保険株式会社
代表取締役会長兼 CEO、出口 治明氏

カラ・キタイは、チンギス・カンに敗れたナイマン部の王族、クチュルクを厚遇しましたが、クチュルクは、(嘗てはカラ・キタイに服属していた)ホラズムと内通して、1211年、カラ・キタイを乗っ取りました。東方遠征から帰還したモンゴル軍は、1218年、カラ・キタイを一蹴すると、1219年、チンギス・カンを陣頭に、ホラズムを目指して大征西(~1225)に出立しました。東西の太陽の決戦は、しかし、あっさりともモンゴルに凱歌が上がりました。

サマルカンドに続いて、1221年には、ホラズムの首都、ウルゲンチが占領され、ホラズム軍を追って、モンゴル軍はインダス河畔に侵入しました。チンギス・カンは、戦争に際しては実に周到な準備を行い、常に戦わずして勝つ形を作ろうとしていた形跡があります。その結果、モンゴルでは、世界地図が発達しました。勿論、精緻な地図は国家機密の最たるものであり、宮廷の奥深く秘匿されましたが、簡便な世界地図は公表されました。わが国(龍谷大学)に残る「混一疆理歴代国都之図(朝鮮で製作)」もその流れを汲むものです。大征西でも、苦戦を強いられたのは、アフガニスタン戦役ぐらいでした。チンギス・カンの後半生は国を挙げての遠征に次ぐ遠征に明け暮れましたが、これは、モンゴル軍の紐帯を強める効果をもたらしました。

1227年、「世界征服者」チンギス・カンは、征西への参加を拒んだ大夏へ遠征し、大夏の投降3日前に陣没しました。国政は、チンギス・カンの大軍団を引き継いだトルイが代行しました。1229年、次男、チャガタイの支持を得て、三男、ウゲデイがモンゴル帝国の2代カアンに就きました(長男ジョチは既に病没していました)。モンゴルでは、クリルタイと呼ばれる部族集会でリーダーの選出など重要事項を決する慣わしがあったのです(この習慣は、現在のアフガニスタンにそのまま受け継がれています)。匈奴以来の議会の伝統がモンゴルにも受け継がれていたのです。

この時のクリルタイでは、大金国への遠征が決定されました。モンゴルは、1234年、大金国を滅



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

ぼして華北を支配下に組み入れました(トルイは 1232 年、陣没しました。ウゲデイによる暗殺の可能性もあると考えられています)。 [南]宋は、モンゴル帝国と協約を結び、大金国に止めを刺しました。この協約も、一種の渲淵システムであって、南北並存が約されていました。ところが、大金国が滅ぶと、[南]宋は、協定に背いて軍を北上させ、一時、開封、洛陽を占領したのです。これが、モンゴル帝国の[南]宋攻撃の口実になりました。海上の盟以降、宋の場当たりの背信行為は、常に墓穴を掘ることになるのです。